

橘 為 義 考 (三)

——道長親近の一家司層の生涯——

福 井 迪 子

一
本稿では寛弘八年九月以後について述べたい。

この期の資料からは、為義の伊賀守在任時代から寛弘期にかけてのそのような文字活動にかかわるものは、見出しえない。専ら忠実な家僕としての、また、国司としての姿がある。その中で良しにつけ悪しきにつけ、特に道長との関係の目立つのが特徴である。この点に焦点をしばって見ることにしたい。

二

寛弘八年十月十六日、三条天皇即位、山陵への報告も終り、いよいよ三条朝の幕明けとなったが、十九日から御悩みの重くなった冷泉上皇が、二十四日遂に行成の夢想通り⁽¹⁾、東三条南院に崩御された。そして十一月十六日桜本寺前野に葬送、二十二日に予定されていた大嘗会も延引の運びとなり、黒みわたる諒暗の世となった。無論、九月十日の定めで左大臣・右大臣・小野宮実資・大和守輔尹・摂津守為義と定まっていた五節の義(『小右記』)も停止

されたものであろう。かくて重なる悲しみの中に寛弘八年は暮れたのである。

京官兼任の為義は在京していることが多い。例によって記録をたどれば、相変らず公私にわたり忠実な姿が窺える。⁽²⁾

寛弘九年(長和元年)五月十五日から皇太后彰子⁽³⁾は故院の御ための御八講を催した(『日本紀略』・『百鍊抄』・『小右記』)。十七日、この日の朝講は五巻目の捧物の儀に当たっていたが、道長の勘氣にふれる一件があった。此日為義は大進として行事を勤めていたのである。道長は自らの日記にはこの事について何一つふれてはいないのであるが、『小右記』は如実に次のごとく伝えている。

十七日甲申 参皇太后宮朝講、(中略)次僧侶退下、次卿相雲客退下、執各捧物、^{東廊下}左相府為令取女房捧物、遣四位五位於西方、其道経階前、大炊頭光榮在其列、相府大怒、以左三位中將教通、令勘当行事大進。為義、其詞云、光榮不可取捧物者也、撰可然人々、可令取之由、兼所令仰也、而乍聞其事出立、光榮太不足言、於為義不可立捧物列、早可罷出者、至光榮、被召仰不可執捧物之由、仍不執、自西方退出云々、

と。実資はまた、女房の捧物のさまについて、「捧物甚優美、以金銀、為風流不可敢記」と述べてもいるが、公卿や上臈女房のすべてが参会しての盛事であつた。その盛事にもかかわらず、前々から申し渡していたごとく人選しなかつた為義への、親昵の者に対する道長の容赦ない怒りである。

道長はこの年五月末から体調が調わなかった。六月四日、病を理由に上表
 (『公卿補任』・『日本紀略』・『小右記』)、六日からは法華三十講を修し(『小右
 記』)、八日には重ねて上表した。道長は病床にあつて娘たちのことが気がか
 りであつた。とりわけ去年一条天皇に先立たれた彰子への心痛は大きく、身
 の心細さにつけて実資にその旨をもらす程であつた(『小右記』九日条)。為
 義は此度びの道長の病状について「此度御病似^レ難^レ憑^レ」と実資に感想をも
 らした程であり(『小右記』十日条)、十五日には「或云、左大臣病間、右大
 臣可奏行一上執行事之由、被宣下云々」(『小右記』)という事態であつた。
 しかし、ようやく七月半ばに至り快復に向つた。そして十月二十日、威子の
 著裳の儀が行われたが、この日も為義は皇太皇宮の使をつとめ(『御堂関白
 記』)、二十六日には前日決定の藤原能宣・兼経らにたまわつた禁色の宣旨を
 下すべく道長の召を受けている(『御堂関白記』)。しかしこうした都の生活の
 反面、為義には摂津守としての悩みがあつた。それは、すでに摂津守の任も
 四年目に当たつていたのだが、前司藤原方正の任中公文が未勘であり、当人
 が公文勘済に応じようとしなかつた。勤勉な為義は当任としての進
 納には努力したもののこの問題には困惑し、遂に越勘によらしめることを申
 し立てていた。その間のことは『類聚符宣抄』により知られるところであ
 る。すなわち次のごとくである。

応^下就^二留案^一勘^中会公文^上前司藤原朝臣方正任中寛弘元二三^四并^四箇
 年減省符班符宣旨等事

右得^二摂津国去閏十月二十五日解^一一^二符^一。被^二左弁官今月二十三^三日宣旨^一

一^二符^一。得^二摂津国去月二十日解状^一一^二符^一。謹檢^二案内^一。前司守從四位上藤原
 朝臣方正。去寛弘二年六月十九日任。同六年正月二十八日得替解任。而
 任中公文于^レ今未^レ勘。頻雖^レ加^二其催^一。空送^二四ヶ年^一。不^レ依^二新制^一。
 無^レ心^二勘済^一。但守為義朝臣当任調庸雜物。任^レ格合期悉以進納。勘^二
 済公文^一。任中欲^レ勤。今依^二前司之緩怠^一。何失^二当任之勤節^一。望請
 官裁。因^二准傍例^一。早被^二下^一宣旨於所司^一。越^二勘彼任税帳^一。弥勵^二
 其勤^一者。今依^二宣旨^一。欲^レ勘^二済彼任^一租出拳帳等^一之处。件年年減
 省官符班符宣旨等。民部史生村主忠茂為^レ成^二省符^一請預之間。去夏之
 比其身死去。仍就^二後家^一尋求之处。已無^二其実^一者。相副同省史生佐伯
 信兼所^レ進申文。言上如^レ件。望請官裁。就^二官符宣旨留案^一。被^二下^一宣
 旨於所司^一。勘済件帳。將^レ致^二至公之節^一者。左大弁源朝臣道方伝宣。
 左大臣宣。奉勅。依請者。

寛弘九年十一月二十九日

左大史但波朝臣奉親^奉

少録内蔵是隆^{奉。同十二月二日。}

(『類聚符宣抄』)

為義は、この越勘の許しによつて漸く前司方正の問題から解放されたが、
 為義自身の摂津守の任期もすでに終りに近づいていた。⁽⁴⁾この時、その為義に
 対する道長の内々の思わくがすでに働いていたのである。少々煩瑣の嫌いは
 あるが資料をあげてみることにしたい。

翌長和二年正月十七日条の『小右記』によれば、

頭弁（朝経）云、昨日主上密々被仰雜事之次、有令褒譽資平給、仰云、前日問事有答對、是只緣大將之氣歟。件事、先年故左大將濟時有所云、同彼言、仍所感恩者、令伺天氣、似有恩、尚書若有闕、左相府適無過絶、計也相合歟者、相府提獎為義朝臣、無他念云々、

とあり、資平に褒譽の論言を給うたことにかかわって、傍点を付した如く、若し弁官に欠があつた時には、道長は為義を推したい意向だといふのである。更に翌日の条にも続いて資平にかかわって、

謁左相国、申資平事、去年相国談、或人云、資平者不可望尚書并右親衛云々、尚書者兄居其官、親衛又予（実資）同官之故也者、資平已為養子、仍不可望右近中将至于尚書、可無其忌、左中弁経通与資平、寔雖云兄弟、資平已為予子、不可謂兄弟、其由具以申了、随又被諾、

と記し、兄の経通が弁官として現在勤務中だが、資平はすでに自分（実資）の養子であり、弁官を望むことには何ら差支えないことを道長に語り、承諾してもらつてはいる。しかしまた二月三日に至り、次のごとくあつて、

資平從内退出云、左相府被候内、於宿所被談、左中弁経通云、資平尚書事難事有三、一位階違違、二兄弟居弁、三歴受領者可任度等難、而大將只今無已之人也、所申難捨者、若有闕者可相合歟、相府所談其旨巨多、然而事旨是也

【小右記】

資平の弁官を望むに当たつての道長の見解が提出された。そして結果的には資平は、同年（長和二）十月二十三日に至り、左權中将（公卿補任）尻付）

となつたのであつたが。

「相府提獎為義朝臣、無他念」との道長の意向は、道長と為義の關係を考へる上で重要なことであろう。弁官は『職原抄』に「無文才一人不居之乎」と称される官である。如何に最賈目とはいえ、道長もやはり為義の文才を認めての、適材と判じる故あつての提獎であつたろう。また今回が、資平への三難の一つに上げたごとく「歴受領者可任度」に当たつていたことも、為義を念頭に思い浮かべる一要因をなしたものではあつたろうが。しかし今『弁官補任』で見る限り、その欠の必然性は認めがたく、為義があげ用いられることもなかつたのである。

道長のこの為義への思ひは、無論、前にもふれたように、今春、為義の摂津守を終えるべく予定されていたからでもあつた。すなわち、正月二十二・三日の除目に受領功過の定めがあつたが、

（二十二日条）左大臣伝仰小臣云、可定由申受領功過者、召弁令進文

書、後定申伊勢為度、美作泰通除目了、仍不統之摂津国為義任終年不動事、以主税寮申旨、申左

大臣、主税寮云、任終年料第三、年越委、是有国々例者亥四点諸卿退下

（二十三日条）定申去夜不定了之美作事泰通次備前通但勘返田租穀事、依

主税寮勘文定申了、両国無過、亦摂津国為義不動事、依傍国之例、重不問

所司

と見える。「第三年越委」の「委」とは不足料のこと。任終の年の分の「不動穀」に前年からの不足があるとの定めであらうが、他国の例にしたがつて重くも問われず任終える運びとなつたのである。

三

国司の籍を離れた為義は、道長家司として、また皇太后宮大進としての多忙な日々を迎えることとなった。

長和二年四月六日、法興院の仏堂建立に際して、皇太后宮からの使に立ち、道長から唐鞍具をたまわり（『御堂関白記』）、二十四日賀茂祭の日には、例年に倍ましての過差を嘆きつつ使の様子を記した一連の実資の記録の中に、皇太后宮の使としての為義の名も見える。更に七月八日には六日に誕生した皇女禎子の第三夜の産養がおこなわれたが、つまりこの夜は中宮職の奉仕であったが――、その様子は

今夜庁官奉仕御産養事、大夫（道綱）、御前、権大夫（経房）、能信等御衣、皆有風流、従大内以朝経朝臣給御劔

（『御堂関白記』）

のさまで、「上達部以下饗饌三献」、「渡殿で打攤」の後、貫首元愷朝臣の問に応じて簾の前に候して、廻粥の答えをつとめる為義の姿がある（『小右記』）。なおまた十四日の第九日の産養は、皇太后彰子が奉仕したが、その御使をもつとめ、八月九日には道長の娘寛子を為義宅に迎えている（『御堂関白記』）等々。

長和三年正月六日、叙位の儀に引き続き受領功過の定めが行われた。昨年の不足分に対する勘文功過の定めであろう。丹後守成行に続いて「摂津国」

について議されたが、事の次第は詳しくは解らないものの、実資は道長の対処のし方に対して極めて批判的である。そして諸卿の反応が興味深い場面を呈している。掲げてみよう。

次定摂津国為義事、件国事、左大臣懇切被催、諸寺条有不快事、然而諸卿默然不陳左右、予問於読勘文之宰相、道方、其答不分明、事之気色恐懼左府歟、仍只注無過由了、

（『小右記』正月六日条）

道長の、家人為儀に対する最良の程の尋常でなかった様子をうかがわせるに、ここでも好資料を提供している。

さて、この年はあまり記録に名は出ないが、五節の十一月二十一日、又々失敗をしでかしてしまった。この夜殿上で群飲、右中将源雅通や左中将源朝任、左衛門権佐為義らが宮達の御供に候せず、専ら飲んで勘当されたというのである。（『小右記』）。

また、その年の瀬もおしせまる十二月二十日、実資は右衛門督懷平の伝えるところを次のように記しとどめた。

十二月二十日壬申

又昨日金吾懷平云、主上被仰云、明。年。但。馬。左。大。臣。懇。切。申。有。可。任。之。人。之。由。

又備中、可任皇后宮申之人、但可奏旧吏済公事之者、以此由可申彼宮者、閑廻愚慮、事頗淡薄、要国皆人々御得分歟、延喜天曆御宇、豈有如此之乎

（『小右記』）

道長や皇后の言い分に対して要国の貴顕の得分に帰することを嘆じ、延喜天

暦の治世の遙かに遠くなりゆくを嘆く実資である。後に明らかになるが、ここでもまた道長の心中秘かに、為義のために思うところがあつたのである。

年が明けて長和四年、正月二十三日から道長は咳病に悩み、二十五日から行われるはずの県召除目の議は延引、二月十六日―十八日の間に漸くとり行われた。

為義の但馬守としての足跡を示す記録は、翌年の長和五年四月に至つて初めて見出せるのであるが、但馬前司国拳の寛弘八年―長和四年に至る動行から、その交替期のあらましについて見たいと思う。長和四年二月の県召除目で交替があつたと思われるからである。源国拳は、一条天皇葬送に際し、為義と共に山作所行事をつとめた一人である。⁽⁵⁾時に当任の但馬守であつた。以下記録を摘記してみる。

寛弘八年（一〇一一）七月八日（葬送日）

巳四月初行山作所事、行事左衛門権佐為義朝臣、但馬守国拳朝臣。

（『権記』）

長和三年（一〇一四）十月十七日

今日但馬守国拳、模法華經千部、令運天台山、如知識触上下令運上、近則昨日以為信真人令申事由事、依功德令仰雜色所等（同二十一日条省略す）

（『小右記』）

長和四年（一〇一五）四月九日（賀茂斎院選子御禊祭の料返済にかかわつて）

進禊祭未進勘文、前但馬守国拳臥病出家、不進禊祭両面錦絹等、以定頼（右中弁）令申左相国、又奉未進勘文

（以下十日・十一日・十四日・十八日・二十日に御禊祭の料をめぐつての論議あり・省略す）

右の引用文の圈点を付した部分に明らかのように国拳は、寛弘八年―長和三年までは当任の但馬守であるが、長和四年四月九日には「前但馬守国拳臥病出家」の由である。したがつて長和三年は、国拳は任終の年に當つていたために前述の『小右記』十二月二十日条にみるごとく、「来年但馬に是非任じたい人のある旨」道長は主上に申し上げたものであろう。国拳の出家は任終えてのもので、二月の除目で為義は道長の意向により但馬守に補されたものであつたのだろう。

四

同年（長和四年）九月二十日、道長の枇杷第に御滞在中だった天皇は、新造成った内裏へ遷御された。⁽⁶⁾出御に先立ち、家子・家司らに敘位を賜ったが、この時為義も多米国平と共に「正四位下」⁽⁷⁾に叙された。『小右記』裏書には「橘朝臣為義家司」と、道長家家司たることが明記されている。

前にもふれたように長和五年四月二十二日条に

藏人頼信宣申云、日来宇佐宮幣料并神人禄料、以下文令催国々、而但馬守為義申云、此国野草、国練用申不堪由者、仰云、先諸国申色代、而致仏神用、指宣旨、仰可見色由了、令申旨非、野草国不奉間非可参殿上由仰

已了、

〔御堂関白記〕

とあるのが為義の但馬守として明記されることの初出である。野草進奉に堪えない旨申したことによって昇殿停止を受けた由。しかし私的には道長への心配り怠りなく、八月には道長の二条第の障子を調進している⁽⁸⁾。

さて、長和五年は後一条帝の大嘗会の年に当たっていた。撰ばれた大中臣輔親が大嘗会歌、風俗歌を詠み、十月二十九日に道長のもとへ持参した。為義は能書であったのか、その悠紀屏風和歌の書写を仰せつかっていた様子であるが、十一月十二日条には

悠紀御屏風和歌輔親奉仕、仰可書由為義、有恼事不能奉仕者、仍一人下

〔御堂関白記〕

と見えて、病のためであろうか、奉仕に耐えず辞退している。

翌寛仁元年（一〇一七）二月上卯恒例の大原野祭を明日に控え、道長は為義を神馬使として立てるべく準備した。『御堂関白記』二月七日条には「為義朝臣渡宅宿、是明日依可立神馬使也」と記されているが、これを限りに為義は記録類から姿を消す。そして十月二十九日条『小右記』頭注に突然為義卒去の由がみえるのである。

去二十六日但馬守為義朝臣卒去、有信所申上也

と。そして『御堂関白記』には、十一月十五日の直物に於いて、但馬守の後任に橘則隆補任の由が記されるのみである。

為義は但馬守任半ばにして世を去った。その生涯は、当代一の権力者たる

道長の忠僕としてのそれであつたといつて過言であるまい。そんな中であつて己が人生をふりかえつての一首がある。『新撰朗詠集』『述懐』に入る。

714 山のはに入りぬる月の我ならば うき世中に又はいでじを

いつわらぬ述懐であろう。当代家司層文人為義の心中を察せしめるに十分なものがある。

年令については定かではない。もし永延元年擬文章試を奉じたと思われるころを二十歳―二十二・三歳と仮定できれば、およそ康保三年頃の誕生となり、天元三年ころ（十五歳ころ）の大学入学、そして、没年は五十―五十二・三歳とならうか。とすれば道長とほぼ同年輩ということになるのである。

五

最後に作歌年代不明のため今までに述べなかつた歌と子息たちについて簡単にふれておきたい。

『詞花集』二九八番に「題しらず」として

君まつと山のはいでて山の端に いるまで月を眺めつるかな

が入集している。同歌は『金葉集』三奏本では「月のあかりける夜、人をまちかねてつかはしける」との詞書で入り、『麗花集』にも、また『後十五番歌合』にも輔尹の「もろともに出でずは来じと契りしを いかがりにし山のはの月」と番えて採られ、能因の『玄々集』にも入れられた作である。

為義の代表的な作品といつてよからう。他に勅撰集では『続古今集』一二六九番に「うつりゆく人のこころにしたがはば なみだも袖にいろやかはら

ん」が入集している。なお『後拾遺集』ならびに『和漢朗詠集』に入った「寛和元年八月七日内裏歌合の歌」いかにして玉にもぬかむ夕されば 荻の葉分に結ぶしら露」は、作者「橘為義」としているが、これについては前にも少しふれたが萩谷氏は菅原為理と見られ、今井源衛先生は源為理説をとられる。いづれにしても「為理」の作であつて為義の作ではない。作者名を誤つたものであるから除外して考えたい。

なお、『玄々集』の為義の作の直前に

孝宣一首 儒者

為義朝臣人づてによばせければ

93こひしくはきてもみよかし人伝に いはせのもりのよぶこどりかな
との、為義に宛てた歌が入っている。作者は為義と親交の程をしのばせる人物を思わせるが、「孝宣」なる人物は見出せない。

これについて川村晃生氏は「なかのぶ」を「たかのぶ」と誤写したための誤記であろうと推定され、以言や嘉言らの父「仲宣」と推定された。⁽¹⁰⁾確かに仮名書名では起こりうる誤写であろうと思われるが、私はむしろ漢字名の「孝道」の「道」の草体が、「宣」の草体と似るところからの誤読誤写であろうと考えたいのである。仲宣の経歴⁽¹¹⁾（天曆―天元にかけて活躍期を持つ）から見ても為義とは年代的に少しずれを感じるからである。一方、源孝道⁽¹²⁾とは前に本稿⁽¹³⁾でも述べたごとく、永延三年、寛弘三年の東三条第行幸には共に詩を賦しているし、また他にもしばしば同座の機会をもった、活躍期を同じくするものであるからである。「儒者」とするには、厳密な意味では疑問

が全くないわけでもないが、文人として名のあつた存在であつた。為義と交友のあつたことは疑いないものと思われるからである。

道長にかくまで愛顧を受けた為義、その要因は何にあつたのであろうか。律儀な忠僕としてのそれに要因は確かにあろうが、相応に詩文に通じ、歌も又相応に詠めるといった文学的素養の豊かさにも一助あつたことは否めないであろう。文学的好尚の強い為政者の下にあつて、家司層・受領層の人々にとって文芸とは一体何であつたのか、改めて考えさせられるものである。

為義の残る作品は少ないが、その素養は、時を隔ててそれぞれ文壇的にも活躍期を持った子息の義通や、また孫の義清・資成・為仲、そしてひまごの琳賢らに詩文・和歌の両道にわたって十分に伝えられていったことは言うまでもない。⁽¹⁴⁾

橘 為義略年譜

身分の欄で括弧を付したものは、その時期にその位官にあったことを示す。推定は「○○カ」とした。〈 〉は注記である。
 事蹟欄・関係事項欄では、()で典拠を()で作品を示した。その略称は次の通りである。

小―小右記、関―御堂関白記、権―権記〔権補〕は権記補遺を示す、左―左経記、弁―弁官補任、紀―日本紀略、百―百鍊抄、類―類聚符宣抄、除―除目大成抄、御産―御産部類記、不知―不知記、尊―尊卑分脉、鏡―大鏡、栄―栄花物語、紫―紫式部日記、麗―本朝麗藻、江吏―江吏部集、歌―平安朝歌合大成(数字は歌合番号を示す)

詩題、歌題は「」で示した。

▲印は出席の可能性の濃いものの意である。

年次	西暦	身分	事蹟	関係事項
永延元 (一条)	987	(擬文章生力)	10・14 一条帝東三条第行幸に際し擬文章生の試を奉ずるか(麗・寛弘三年三月四日「渡水落花舞」の「十年前花下情」による推定)	10・14 東三条第行幸。詩宴「葉飛水面紅」擬文章試「池岸菊猶鮮」を行う(紀・江吏)
正暦4	993	(文章生) 蔵人所雑色	正・9 蔵人所雑色に補さる(権・小)	正・9 所蔵色藤原脩政蔵人となる(小)
長徳元5	995~994	(蔵人)	この間に蔵人に補されたか(尊) 8・1 『朝野群載』五、「朝儀下 月奏」に「蔵人蔭孫正六位上橘朝臣」とあるのは為義か	
2	996	肥前国権守 従(五)位下	正・25 叙爵、肥前国権守補任(大問書)	正・10 橘行資任蔵人(小・権) 正・25 任蔵人平和信(除)・橘則光(除・権)

3	2	長保 元	4	3
1001	1000	999	998	997
伊賀守				
<p>488</p> <p>正・9 左府の使として穆子七十賀の料の屏風を色紙形依頼のため、行成宅に送り届ける(権) ●2・28 一宮家家司となるか(権) ●3・18 直物に申文を奉る(権) ●7・23 これまでに伊賀守補任。今上一親王(敦康)家司はそのままとする(権) ●8・11 一宮敦康親王真菜儀に際し侍所饗三十前を供す(権) ●10・7 この日までに東三条院四十賀の屏風歌を献上す(権) ●10・8 東三条院四十賀の屏風歌十二首の中に為義一首撰入さる(権) ●秋ごろ伊賀へ赴任す〔兼澄集(異本系) 49・50 後拾遺集</p>	<p>10・14 行成の使として、左府へ斎宮着裳のことを申す(権)</p>	<p>8・22 道長から馬一匹をたまわる(関) ●10・17 行成の維摩会勅使より帰参の旨を道長に取つぎ告ぐ(権) ●11・22 左府から、実資に五節の料物を贈る使をつとむ(小)</p>	<p>3・28 内裏の一部焼亡の件について行成からとりつぎ道長に報告する(権) ●7・14 孟蘭盆会に殿上に祇候の者無きにより、左府道長、為義に昇殿を聴せうとする(権)</p>	<p>8・28 申請中の桂芳坊の修造を明春まで延引することを許さる(権補)</p>
<p>2・28 一宮(敦康)家家司を定む(権)</p> <p>10・7 為時、道濟ら東三条院の四十賀の屏風歌献上、行成これを見る(権) ●10・8 屏風歌撰入歌、左大臣三首・輔尹一首・兼澄三首・輔親一首・為時一首・為義一首・道濟一首(権)</p>				<p>10・28 若狭守兼澄、大宋国商人仁聰等に陵礫され面目を損ず(小)</p>

寛弘 元	5	4	3	2	1
1003	1004	1005	1006	1007	
				〈内蔵権頭を辞 すか〉	
5・15 左大臣道長歌合に参加し歌をよむ、式部大夫 行資と番う「惜夏夜月」「遙聞敦公」「対水辺松」〔歌 一〇九〕 ●12・4 宇佐の使に立つ（紀・権）途上 歌を詠む「海の上に月をまつ」〔後拾遺集526〕	3・9 東宮（居貞）昇殿聴さる（関） ●12・13 減省申文を奉る（権）	正・20 受領功課の定めで伊賀守為義任中濟事を認め られる（小） ●1・25・27の除目で内蔵権頭に任ぜ られたか ●2・7 内蔵権頭として、春日祭の内蔵 寮の使をなす（権）	3・4 東三条第花宴に参加、殿上の五位を率いて奉 仕、詩を賦す「渡水落花舞」〔関〕〔麗〕 ●10・2 小 除目に「任中檢公文」（内容ニツイテハ「為義任中濟 公事由文章也」トアル）の申文を奉る（関）	▲3・3 上東門第曲水宴に参加するか（殿上地下文 人廿二人）「因」流汎酒〔関・権・江史〕 ●関5・17 為義、俊賢や頼通・広業らと共に道長の金峰詣のため の長齋に籠る（関） ▲9・9 重陽宴「菊花映宮 殿」（紀）に参加か。「群臣参入……文人参入四五位 一列……」（九月九日記）	3・18 陸奥守道貞に道長餞す （権） ●関9・16 陸奥守道貞 朝臣妾子下向す（関）
	11・13 一宮御書始（権）	3・4 東三条第花宴、匡衡序、 左府、儀同三司・左金吾・右金吾 ・源明理・紀為基・為義・源孝道 ・藤為時・藤広業の詩あり〔麗〕 10・2 国司欠をめぐって政職・ 兼澄申文を奉る（関）	正・28 除目に於て能通朝臣任内 蔵権頭（関） 4・25、26 内裏密宴「所貴是賢 才」（紀・関） 10・2 敦道親王薨ず、年二十七 歳（権）		

5	1008	左衛門権佐 中宮権大進	7・12 為義滝口安倍為方の下馬せざるを咎めるにより、為方恥じて出家す（小） ●9・13 皇子敦成親王の第三夜の産養に際し権大進として奉仕す（御産・不知）	9・11 敦成王誕生す（紀・関・権・紫）（中宮大夫は齊信・権大夫は俊賢）
6	1009	（兼摂津守力）	正月 兼ねて摂津守に任ぜらるか	正・（28） 匡衡任尾張守（類） 3・4 為時任左少弁・輔尹任大和守（権裏書） ●4・5 為憲任伊賀守（関・権裏書） ●7・28 具平親王没す（紀・関・権）
7	1010		3・14 行成石山詣に際し、「令為義献摺袴」とあり（権頭書、但し文室為義の可能性もある） 5・23 道長家法華三十講に非時の儲をなす（関） 12・4 道長、為義に馬七疋を飼はしむ（関）	7・17 一宮元服す（権）
8 （三条）	1011	従四位下 （左衛門権佐 （兼摂津守 兼撰津守）	正・5 従四位下となる、昇殿旧の如し（権）（勘仲記四位廷尉佐年々） ●2・10 昇殿（関） ●4・10 東宮主馬舎人と一条殿雑色男乱闘の件につき道長に告げる（関） ●6・25 一条天皇御葬送に、山作所行事の役として奉仕の件定められる（権）また広業・光榮と共に葬送所を実検して定む（関） ●7・8 葬送日。山作所の行事を国挙と共につとめる（権） ●8・2 院の法事に四位として堂童子奉仕す（権） ●8・11 御読経結願に上達部殿上人座の為に饗甘前を備う（権）同日主上東三条第より内裏入御に際し昇殿を聴さる（小・権）	正・5 為義息男義通（左兵衛少尉）藏人に任ぜらる（権） ●6・13 一条天皇讓位。三条天皇受禪（紀） 同日義通院藏人となる ●6・23 一条天皇崩御す（紀） ●7・8 一条帝葬送（紀・権） ●7・11 有国卿薨ず（小・権） ●8・11 三条帝東三条第より内裏に入御す（小・権） ●10・16 三条帝大極殿において即位さる（紀） ●11・16 冷泉院葬送

2	長和元	
1013	1012	
<p>〈撰津守の任終える〉</p>	皇太后宮大進	
<p>正・17 左相府道長弁官の欠に対して為義を提獎す（小） ● 正・22 23 除目受領功過の定めにおいて撰津国為義任終年の不動穀が問題となるが傍国の例により重くは問われず（小） ● 4・6 道長法興院の仏堂建立にさいし大進として皇太后彰子の使をなし道長から唐鞍をたまわる（関） ● 4・24 賀茂祭に大進として皇太后宮の使をとめる（小） ● 7・9 禎子三夜産養の儀に左衛門佐として簾前に候して廻粥に奉仕す（小） ● 7・14 禎子内親王第九夜、皇太后</p>	<p>● 9・10 左大臣・右大臣・実資・大和守輔尹と共に撰津守為義も五節を出すことに決まる（小）</p> <p>2・2 中宮御所に小火のあることを道長に告ぐ（関） ● 2・23 道長皇后宮（彰子）に候する間に殿僧房に牛斃の有ることを道長に告ぐ（関） ● 5・17 枇杷殿に於て五月十五日から五箇日の予定で始めた皇太后宮彰子の故一条院の為の法花八講の朝講の捧物の行事をとめる。光栄に捧物を取らしたため道長の意にかなわず怒りをかい勘当さる（小） ● 6・10 左府の瘡病の病状について実資に語る（小） ● 10・20 威子著裳に際し、皇太后宮の贈物の使をなす。大掛・袴の禄を賜う（関） ● 10・26 道長・為義を召して能信らの禁色の宣旨を下す（関） ● 閏10・27 大嘗会御禊の衛府督代をとめる（夕拝備急至要抄・栄いはかげ・鏡道長） ● 11・29 前司藤原朝臣方正の公文の越勘を請い許される（類）</p>	<p>● 9・10 左大臣・右大臣・実資・大和守輔尹と共に撰津守為義も五節を出すことに決まる（小）</p>
7・7・禎子内親王誕生す（紀）	<p>2・14 宣命により皇太后遵子を太皇太后に、中宮彰子を皇太后に女御妍子を中宮になす（紀）</p> <p>4・19 藏人義通らに禁色ゆるさる（小二十日条）</p> <p>5・15 彰子枇杷殿に於いて故一条院のために法花八講講説会を開く（紀・関・百・小）</p>	（紀）

<p>(後一条) 5</p>	<p>4</p>	<p>3</p>	
<p>1016</p>	<p>1015</p>	<p>1014</p>	
<p>但馬守</p>	<p>正四位下 〔二月十八日か らの県召除目に 但馬守に任じた か〕</p>		
<p>4・22 諸国に宇佐宮幣料・神人禄料を課したが但馬守為義堪えざるの由を申す、依って「野草国不奉間、非可参殿上」——昇殿を停止さる(関) ●8・2 道長の二条第に為義障子を調進す(関) ●11・12 輔</p>	<p>9・20 天皇枇杷第より新造内裏への遷御にさいし、為義、道長家家司として正四位下を賜わる(関・小)</p>	<p>正・6 叙位、受領功過の定めに、摂津国(為義)について、左府の気色を恐れて公卿ら左右陳べず、過なき由を注す(小) ●11・21 五節に際し、殿上に於て群飲し、左衛門佐為義ら宮達の御供に候せず勘当される(小)</p>	<p>宮よりの産養に際し為義御使をなす(関) ●8・9 道長女寛子(近衛御門女子)為義朝臣宅に渡る(関)</p>
<p>4・16 陸奥前司道貞没す(左) 正・29 三条天皇讓位す(紀) 後一条帝踐祚(紀)</p>	<p>2・18 資業左衛門権佐を兼ね(弁) ●同日 道済筑前守に任ず(関) 4・9 前但馬守国挙病に臥し出家す(小) 9・20 天皇新造内裏遷御。道長家家の子、家司らに賞をたまう(関・小)</p>	<p>正・6 道長、摂津国^{為義}事について懇切に催さる。諸寺の条に不快事が有ったが諸卿左右申さず。実資の質問にも勘文之宰相(道方)の答不分明、左府の気色を恐れるがごとくであった(小) ●12・20 明年但馬守に任ずべき人のある由を左大臣道長主上に懇切に申し上げたとのこと(小)</p>	

寛仁 元	1017		親和歌奉仕の悠紀屏風和歌を書くべき由承ったが、病のためか、奉仕不能の由を申す（関）
		2・9 明日の大原野祭に、道長の神馬使に立つため 道長宅に宿す（関） 10・26 但馬守為義朝臣卒去す（小二十九日条）	

〔注〕

- (1) 【権記】寛弘八年七月十二日条。「夏末夢、天大雪、時甚寒、其雪自天降、満于虫損「敷力」板□、情思之、自天降、遭天皇御晏駕也、満于堂上足踏者、躬自行此夜之事也、俗以夏雪之夢為穢微也、或者又夢檢非違使多降自天、立床子於鳥戸野、共坐之、ト山陵云々、于時院御惱一条之間也、当于崩御為夢微、而依拊吉方、不ト此地、其後冷泉院上皇自九月朔不予、十月廿四日遂崩、来月十六日可有御葬、其処可在此野云々、其夢相有亦説、又雖不可信、松桑有驗、又謂凡夫之通信哉、
- (2) 【御堂関白記】寛弘九年二月二日中宮御所の火事の報告、二十三日、牛斃の報告など。
- (3) 長和元年二月十四日壬子。宣命・尊皇子皇太后皇子為皇子太皇太后。中宮為皇子皇太后。女御正二位藤原朝臣妍子為「中宮」。（『日本紀略』）により、為義も「中宮大進」から「皇太后宮大進」となった。
- (4) 【類聚符宣抄】文中に明記される如く、為義は藤原方正の後を受けて、去る寛弘六年正月摂津守に補せられたものであることは前述の通りである。したがってこの年寛弘九年は四年目、任終の年に当たっていた。
- (5) 寛弘八年六月二十五日、一条天皇崩御にかかる入棺、葬送に関する定め。山作所 国拳 但馬守元後院。別当 但非殿上。
- (6) 廿日丁卯、天皇 自 左大臣枇杷第 入 御於新造内裏。酉刻。出御。御馬八疋 献之。次有「勸賞」。（『日本紀略』）。
- (7) （略）被賞家子、家司等、正三位能信、他子等皆位高被賞一人、正四位下多米国平・橘為義、從四位上定頼、是中宮亮、……（『御堂関白記』）。
- (8) 長和五年八月二日 至二条、見為義朝臣調進障子（『御堂関白記』）。
- (9) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』「寛和元年八月七日内裏歌合」の項。今井源衛先生
- 【花山院の生涯】（桜楓社 昭和四十二年）。
- (10) 【能因法師集・玄々集とその研究】（昭和五十四年六月 三弥井書店）。
- (11) 生没年未詳。弓削氏。天曆四年七月二十三日東宮出納。天徳二年正月三十日備中権大掾。天禄元年十二月十六日権少外記（元冷泉院主典代出納）。安和三年少外記。天延二年正月、大外記。同十一日從五位下。同二十八日三河権介。天元三年正月二十九日某国守（『外記補任』による）。

(12) 孝道は『続本朝往生伝』一条天皇の項に天下之一物たる「文士」として数えられ、『本朝麗藻』の詩人。『江談抄』にも「凡位を越える者」と匡衡の行成に書き送った六人の中にその名がみえ、秀句についても論ぜられている。

正暦四年十一月十五日条には彈正少弼として（『小右記』）、長徳二年六月七日の条には右権佐檢非違使として（『小右記』）、長保三年閏十二月七日条には大和守として見え（『權記』）、寛弘四年四月二十八日には越前守補任（『御堂関白記』）、寛弘七年三月三十日（『御堂関白記裏書』）には越前守として死去のことがみえる。内裏詩宴は勿論、道長の詩会にも参加している。

(13) 橘為義考（二）本誌第十号（一九八六年六月二十日発行）。

(14) 子息橘義通は『後拾遺集』作者（385番）。孫の義清は長暦二年九月十三日権大納

言師房歌合、永承年間九月十九日関白左大臣頼通家蔵人所歌合に出詠。文章道出身。資成は詩人。『中右記部類紙背漢詩集』に二首入る。義清と共に頼通家蔵人所歌合に出詠。為仲は和歌六人党の一人といわれ、『後拾遺集』以下十首入集。歌人であると共に、『中右記部類紙背漢詩集』にも入る詩人でもあった。ひまごの琳賢は天仁二年十一月、修理大夫頭季歌合以下多くの歌合に出詠、永久四年五月には自ら主催して歌合を催す。等々。

「橘為仲集考」（久保木哲夫「国語と国文学」昭和四十六年四月）「和歌六人党に関する試論」（犬養廉「国語と国文学」昭和三十三年九月）・「橘為仲と歌集」（犬養廉「国語と国文学」昭和三十三年十二月）・井上宗雄「平安後期歌人伝の研究」第三章歌人群像「琳賢」等先学の御論考がある。

（昭和六十二年五月十一日受理）